授業実践の記録／「勉強は何のために？」中学2年生の問いに答える＝「教職入門」第3回

法政大学社会学部非常勤講師　綿貫　公平

はじめに

2012年3月、35年間の中学校教員生活を定年退職した。と同時に4月から、ひきこもっていた若者の社会参加を支えるNPO団体で働くことを決めていたが、法政大学多摩キャンパスの「教職入門」を担当するよう、お声かけいただき、9年を経過して今に至る。もともと、大学で専門とすべき美術分野の勉強を怠り、留年を繰り返し、学内の生協で働きながら、かろうじて教員免許を取得して卒業できた。教職に就いたのは、高邁な理想を掲げたわけでなく、生活を優先させ“奨学金返還免除職”であることを念頭においた「デモシカ」教員、10年くらいやってみるかと軽い気持ちだった。1977年、生徒の「非行」「荒れ」が話題となる時代、下町のE区がスタートだった。初年度はビギナーズラックというべきか、意外なほど中学生との日々に楽しさを感じた。当時の中学生と地域の保護者にいただいた「先生を育てたのは自分たち」との言葉が支えとなって、その後幾多の紆余曲折を乗り切れたのだと感じている。

また、私自身の中学生時代を振り返れば、中1（1964年）の秋、自身が起こした事件を機に「もう（教師の）その手には乗らない、乗るまい」と心がけていた。学校での生活は二つの部活を掛け持ちし充実させていたが、それ以上に、早朝の新聞配達（〜中3の12月末まで）や地域の異年齢集団で遊ぶ生活も大切な時間だった。自分は自分、他人と比べて（教師に）煽られるのはたまらない。地域の方言で言う「そんぴん」で通した。

そんな私が教職を志望する学生に「教職」を伝えるおこがましさ、自分のことは棚にあげる後ろめたさを感じることもあった。しかし、「反面教師」も教師のうちと、少し居直りながら努めさせてもらっている。

2021年度が、非常勤講師最終の年にあたり、ささやかな実践のメモのようなものではあるが、お世話になった貴大学の教職課程年報に記録を留めておきたい。

〔1〕「観」を揺さぶること

「教職入門」は、教職課程を履修する入り口とされる。受講する学生の9割は高校を卒業したての1年生だ。大学の授業づくりで心がけてきたのは、自分（たち）の学校現場の教育実践を振り返り、その時々の生徒や保護者、地域さらに学校の実状を捉えながら取り組んだことを率直に伝えること。学生が個人の限られた経験を絶対視するような、固定的な思い込みを崩すことだった。学習観、学校観、労働観、生徒（子ども）観、教師観、…言わば諸々の「○○観」を揺さぶること話したが、私の側に必ずしも確たるものがあったわけではない。

初回の自己紹介では、どんどん球を投げるのでしっかりキャッチするなり、故意にファウルにするなり、バットで打ち返すなり、応答して欲しいと伝える。サッカーの攻撃に例えれば、サイドからセンターのゴール前に（高めの）ボールを蹴り上げるから、うまくシュートして、と。そんなイメージでいる。

1）「勉強は何のために？」を学習課題とするきっかけは、中学3年生の発表から

このテーマを中学生の学習課題として取り組むことを、より強く意識したのは、1985年多摩地域の中学校での出来事からだった。中学生意見発表会の学校代表となった3年生Hさんの「世のため人のために学ぶ」と題した発表の衝撃は忘れられない。Hさんは、小学校入学以来、各担任の先生が話してくれた「自分のために勉強するんだよ」ということを、その通りに感じてきた。けれど、ある本を読んでから、大きく変わったという。彼女の言葉は、教員8年目の私と担当していた中2生徒の胸の中に眠っていたものを刺激し、目覚めさせてくれた。

Hさんの発表は、次のように続く。（長くなるが、私の実践工夫の原点でもあり引用する）

「…その本は単刀直入に“勉強とは世のため人のために役立つ人間になるためにするものだ”と書かれていました。私は自分のためにするものだと考えていただけに“おやっ”と思いました。

そして、この言葉の響きが良いせいもあって、理論的にはこれが正しいと思いました。

しかし、レベルの高い高校、有名な大学へという学歴社会の中で、私の勉強する目的は変わらず、良い学校に入るために勉強する姿がありました。

しかし、中学校に入り勉強をする内容・時間が増え

るようになると、この『世のため、人のため』という言葉が気になり、自分は何の目的で勉強しているのだろうと、ひどく悩み考えるようになりました。

私には憧れている職業がありましたが、しかし、絶対その夢を叶えてみせようという意志はありませんでした。それゆえに、勉強する目的がさらにわからなくなり、迷いました、夢がなんであろうと、良い学校に入るという目的だけではどうしても勉強をすすんでする気にはなれないのです。そして、好きな職につくためにというだけでも、やる気が出ませんでした。

ある日、私の夢が変わりました。これは誰にでも経験のあることだと思います。私の夢も、今までに何回も変わりました、でも、この時の夢は、今までのものとはまったく違っていました。今までは、憧れから夢へと変わったものですが、この夢は学習してきたことから生まれ、そしてこの夢の中に『世のため人のために役立つ働きをしたい』という意志がありました。私はそれからようやくマイペースで満足できる勉強ができるようになりました。今の成績は良くありませんが、勉強したーつひとつが自分のものとなっていることで満足しています。

今の日本は、賄賂、地上げ屋、アパルトヘイトの国へ経済阻止の計画を無視した貿易など、自分たちの利益しか考えていないような腐敗した組織が多く見られます。自分のためにと思って勉強する人が増えれば、ますますこのようなことが、多くなると思います。ですから、同じ中学校の仲間の人たちに、友だちを蹴落としてまでも良い学校に入り、楽な暮らしを将来送るために勉強する人がいないことを願うとともに、自分自身、また『自分のために』という考えを出さないように、自分に対して厳しくしていかなければならないと思います。…（以下略）」

中学生らしい、正義感にあふれるHさんの堂々とした発表を聞いた2年生は、ちょうど進路学習をスタートさせる時期に当たり、全員に「勉強は何のためにするの？」という問いが投げかけられていた。出されたレポートにはHさんの発表を意識した感想が多く見られた。学年の発表会とともに、2ヶ月近く「学年だより」（私が編集担当）でも連載し、保護者の意見も募り掲載した。この問いに関わる話し合いは家庭の中にも広がっていった。折しも、バブル期の日本。Hさんの言うように、自分の進路が周囲の人々の進路、社会全体の進路を考えることにつながっていくことに気づきつつあることは、2年生として大きな収穫だったと思う。

2）大学の授業実践で、なぜ「中学2年生の質問」に答える、としたか

私（たち）の取り組みの多くが中2の時期ということもあるが、継続して「中1の初めての定期テスト前」「中1の学年末」「中2の夏休み明け」…たとえ同じ学年集団であれ、状況に応じて繰り返し「勉強は何のために？」という問いを立て、その時々の中学生と実践してきた。

ただ、「教職入門」で「中学2年生＝14歳」を対象とすることには、様々な思い入れがある。短い中学校生活の3年間、最も変化（成長）の大きいのが中学2年生だ。3年生からバトンを受け取り、生徒会活動や部活動でも学校生活の中核を担う。また、何より一人ひとりが第二次成長（性徴）期の真っ只中にあり、心身の成長は著しいと同時にアンバランス。家族との関係、心身の発達の不安定さに揺れる年齢で、生活指導上の課題もあらわになる。

初任の頃、少し年上の同僚：養護教諭と数学科教諭の共同研究による発表が興味深かった。養護教諭が、中学2年生の男子生徒に「精通」の時期を尋ね、数学のテスト結果と重ね合わせたという研究。そのグラフは、数学のテスト結果の伸びに一旦「停滞期」が見られ、その後右上がりに伸びる生徒、下降気味に陥る生徒の「分岐」が見られるという。その「変化」を支えるものは何か。学びへの意欲を支えるものとしての学校の実践課題、家庭環境という背景、因果関係を問うものだった。ほんとかいな？と思いながらも、自身の経験から頷くものでもあった。

また、世に「14歳」を掲げる書物は多い。私の書棚にも『14歳からの哲学』『14歳の君へ』（池田晶子）、『14歳からの経済学』（竹中平蔵）…、『14歳の本棚』とするアンソロジーも文庫（新潮文庫全3巻）で出版されている。ズバリ『14歳』という児童文学（後藤竜二）、自伝小説（千原ジュニア）がある。石田衣良は14歳の4人組が主人公の小説『4TEEN』（2003）で直木賞を受賞した。文庫本化されたあとがきに、作者本人が書いている。「自分自身の十代のなかで一番楽しかった年はいくつだっただろうか。高校時代は本ばかり読んで暗かった。やはり中学生がいいだろう。それも受験勉強が厳しい三年生でも、まだ中学に慣れていない一年生でもない。やはり底抜けにたのしかったのは、中学二年生十四歳のときだ。」（同じ主人公4人組の2年後を描いた続編『6TEEN』も面白い）。

中学校生活の三年間だけではない、長い人生の変わり目であり、「自分」を強く意識する「14歳の質問に答える」ことを想定して、機械的に振り分けた数人のグループ（Zoomではブレイクアウトルーム、以下BR）で、自分の経験を通した言葉を紡ぎだし、他人の意見を聞き取り合い、グループとして「ひとつ」にまとめる作業を行う（無理は承知）。14歳のストライクゾー

ンに投げ入れる回答、響く言葉を探すのは容易ではない。各人の学習観が問い直される。あらかじめグループに A3 用紙とペンを配布し、記入してもらい、いくつかのグループに教壇に立ち、発表してもらうという流れだ。

3）このテーマの前に行っていたこと

「勉強は何のために？」は第 3 回目のテーマである。ここに至る 2 回とも、そのテーマに向かう伏線と考えており、補足しておきたい。

初回は、オリエンテーション。自己紹介：私のこれまでと今、関心を持っているテーマ、動いていることを伝える。さらに、マイケル・ムーア監督の映画『世界侵略のススメ』（2016 年公開）が世に出て以降は、映画の中の一部「フィンランドの教育」（約 10 分）を観てもらってきた。もうここに描かれた映像だけで、学生は「これまでの自分の受けた教育／学校体験」と比較し、自分の中に確立し「絶対視」しつつあった価値観が揺さぶられていくようだ。以下、初回の RP から。

●衝撃だった。学力で世界一を取るということは、とてつもない量の勉強をしているのかと思ったが、まさか授業時間が 1 日 3、4 時間しかないことに驚いた。ただ勉強をすることだけが脳を活性化させるのではなく、遊ぶことによっても脳は活性化されることに納得がいった。フィンランドでは、生活のすべてが学習であるように見受けられる。(K)

●自分が抱いていた「教育」という概念を真っ向から反対してもらったと感じた。今まで学校という場所は、席におとなしく座って先生の話を時間いっぱい聞く場所であり、受験競争に勝ち、いい高校・大学に進学するためには、勉強が苦痛だと感じても我慢して、知識をひたすら身につけないと将来困る、といったようなイメージを抱いていた。しかし、フィンランドの教育は、そんな私が抱いていた概念とは反対で、生徒を主体として考え、勉強を強制することをしない。勉強は、自らの体験や好奇心から学ぶことに重きを置くことで、1 つの体験から枝葉が分かれていくように学びが広がっていくことを指すのだと感じた。このような教育は、生徒自身の学びを手助けするだけでなく、学校が嫌だと思う感情も取り払われ、ストレスフリーの精神状態になることで、いじめと言った副産物の問題解決にもなるのではないかと感じた。(S)

●…フィンランドの教育は「幸せになるための学校」という考えなのに対し、日本の学校は「不幸にならないための学校」であること。(W)

●…フィンランドのように、興味を持ったことや好きなことを学ぶ方がよほど有意義です。自由に使える時間は多く、遊びなどを通して自分の将来したいことも探すことができるでしょう。私が高 1 の時に、クラスにフィンランドから半年間留学にきた子がいました。その子は独学でしたが、日本語がペラペラで、日本とフィンランドを繋ぐデザインの仕事がしたいと言っていました。はっきりとした夢が定まっているからこそ、それを叶えるための学びにも力を入れることができるのだと思います。(K)

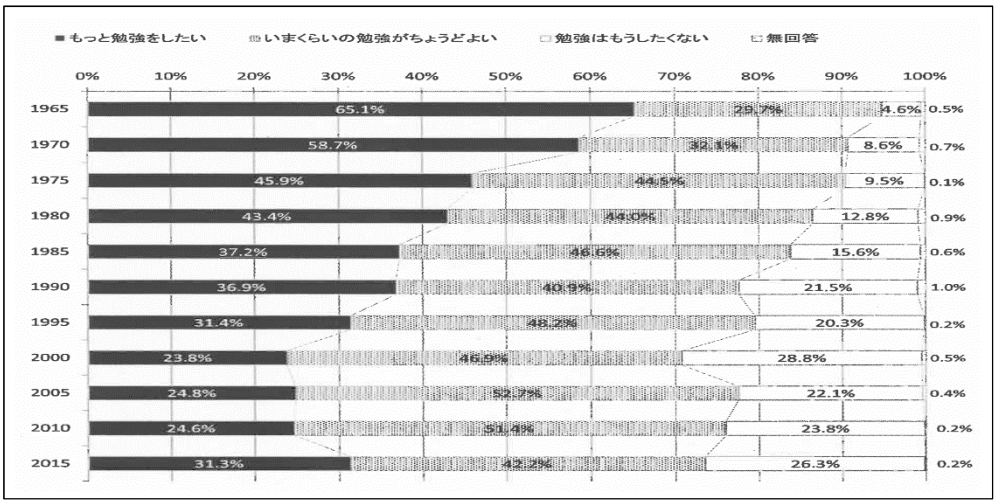
※講義通信『こだぬき』No.1（2020 年 4 月 27 日発行）には、27 人（／129 人）の RP から掲載し、それぞれ、私のコメントを付している。「反対の意見」や「誤解」は必ず取り上げ、私の意見を述べる。明らかな聞き取りの間違い・勘違いは訂正し、時に私の釈明も含めて応答する。

2 回目は、「学校は『現代の子どもたち』は変わったのか？」をテーマとする。『日本の素顔～現代の子どもたち』の映像（約 30 分）を見てもらう。「現代」と言っても 1963（昭和 38）年、この年の「子どもの日（5 月 5 日）」に NHK が制作放映したドキュメンタリー番組だ。戦争に至った国家主義教育への反省のもとに、戦後「民主化」された教育は、日本国憲法と教育基本法（1947 年）を具体化する民主主義と「個性尊重」を掲げてスタートした。

しかし、1950～51 年の朝鮮戦争を画し、「池田・ロバートソン会談」(53) を経て再軍備がすすめられる。さらに 60 年安保改定後の高度経済成長政策と軌を一にして「学力テスト」導入 (61)、経済審議会「経済発展における人的能力開発の課題と対策」(63)、「期待される人間像」(66)、…60 年前後、再び社会は「右カーブ」し、国家主義的な雰囲気を帯びていく。教育政策に経済界からの圧力が加わって行く。映像でも「産業界は若い労働力を必要」とし、地方の中卒さらには高卒の生徒を「集団就職列車（1954～75 年）」で大都市圏に運んだことがうかがえる。

この回では、「対面」の際は、映像を見た感想を数人のグループに分かれ、軽く自己紹介の後、この 50 数年で「変わったこと」「変わってないこと」を、それぞれの言葉で交流し合う。他の人の言葉を聞きとる練習でもあり、言いっ放しでいいことを伝える。※昨年春は「資料配布型」で行った。

考える資料として、藤沢市教育文化センターが 1965 年から 5 年ごとに実施している「藤沢市立中学校 3 年生の学習意識調査」の結果のグラフを読み解いてもらう。みなさんはどう考えるだろうか。学生にはまずこの設問は何かを考えてもらう。少し間を置くが、まず答えは出ない。実は「もっとたくさん勉強したいと思



いますか？」という「勉強の意欲」を問う設問だ。

左側の黒ベタは「もっと勉強をしたい」と答えた生徒の割合で、1965 年は 65・1%、調査の回ごとに減少して、2000 年以降は 24%前後。最新の 2015 年は若干増加し 31・3%となっている。（2020 年度の調査結果は、2021 年 3 月に公表されると思う）グレーは「いまくらいの勉強がちょうど良い」、右は「勉強はもうしたくない」と答えた生徒の割合、2000 年調査の 28・8%が最も多く、1990 年調査以来ここしばらくは 20%を超えている。ちなみに 1965 年はわずか 4・6%にすぎない。

このグラフを見ての感想を問えば。「もっと勉強したい」という生徒が調査の回ごとに減っている。昔の人は学習意欲が高かったんだ。…と言った素朴なコメントが返ってくる。もちろん「学びからの逃走」（佐藤学）の言葉を使う学生はいない。

私から「それは、そうだけれど映像『現代の子どもたち』を観たばかりだし、もう少し時代背景を考えて…」と声をかけるが、なかなかに難しいようだ。「1965 年の中学 3 年生は、私より一歳年上の世代。中学卒業と同時に都会に働きに出た、夜間定時制で学びながら働きだした、自分の家業を継ぐために家事手伝いに入った同級生が合わせて 3 割を少し超えていた（早朝の新聞や牛乳配達仲間の数と重なる）。神奈川県の藤沢市は、今でこそ少し離れた首都圏のベッドタウンだが、当時はどうだったろう。」

「先に観た映像では、63 年当時の高校進学率の平均は約 62%だとしている。数少ない中卒就職者を励まし合う場、先駆的な取り組みとして“あすなろ会”の活動が紹介されていた。その都心の新宿区立四谷二中は高校進学率 95%とのナレーションがあったよね。あの教室の場面で、黒板の前に足を組んで座り、若者たちの声をメモしていたのが池上正道さん、私の所属する全国進路指導研究会を立ち上げた方、初代の委員長。映像の最後に、教員と教育の課題を切々と語っていたのは、やはり研究会の理論的な指導者だった菊地良輔さん。研究会は 1963 年、この年に設立スタートしている。」

「よく“学びからの逃走”という言葉が語られるが、私がこの調査の存在を知り、初めて冊子を手にしたのは 2005 年の調査報告書。その時、数ある中で、この設問と回答のグラフに最も興味を惹かれた。もっと学びたい。学びたくても学べない状態に置かれた中学 3 年生がたくさんいたのだと思う。そうした中 3 生の思いが、このグラフに表れているのではないだろうか。調査の分析部分にそうした言葉がないのが、不思議なくらいだ。」と補足している。

『現代の子どもたち』の映像はもちろん白黒、光学録音で聞き取りにくい。でも、あの時代の空気は伝えている。高度経済成長と所得倍増計画で、経済的には戦後から脱していた。中学生は、子どもの数が多い「団塊世代」だ。少しでも「良いところ」への競争は激しく、学校外に学びの場（塾）が生まれ、教科書に準拠した参考書や問題集が爆発的に売れる。私の田舎は数年遅れながらも似たような感じだった。映像では、片や「放任型」と名付けられ、親が子どもの教育に無関心であったり、必死で働いても経済的に高校進学が叶わず、「就職」の道を選択せざるを得ない中学生がいることを映し出していた。学校の授業でも、「就職組」と「進学組」が分断され、生徒同士のトラブルや「不良行為（非行）」と生活指導の大変さも語られていた。

時間に余裕があるときは、昨年亡くなった漫画家：矢口高雄さんの漫画『螢雪時代―ボクの中学生日記』の中から、「こうなったらいわせてもらうだ！！おら高校さいきてえ！！」（第 5 巻 297 ページ）のコマ前後のエピソードを紹介する。中 3 の学級通信、学年通信、進路通信、いたるところで「（たとえ時代状況は変わっても）高校は、このタカオ君のように自分の強い思いで向かうところ」じゃないかと中学生に伝えてきた。

4）1963（昭和 38）年は、教育の大きな転換点だった

NHK が制作した映像では触れられなかったが、この年「高校入試」をめぐって、大きな転換がなされている。戦後の新制高校の理念は「高校三原則」としてあり、新制高校の位置付けは 1948 年の発足以来「希望者全入」「入試はしない」ことを建前としていた。1963（昭和 38）年 8 月、文部省は『公立高等学校入学者選抜制度要項』を出し「…高等学校の目的に照らして、心身に異常があり就学に堪えないと認められる者その他高等学校の教育課程を履修できる見込みのない者をも入学させることは適当ではない（いわゆる「適格者主義」）」と変えたのだった。翌 64 年の高校入試に臨む生徒は、1948 年生まれであり、団塊世代（47～49 年生まれ）の真ん中に当たる。この世代は全国で同学年の子どもが、毎年２６０万人を超えていた（合わせて８００万人を超える）。当時の学校施設は、たとえ増設したとしても「希望者をすべて受け入れる」ことは困難だったかもしれない。しかし、それ以上に、高度経済成長を支える製造業に従事する「若年労働者」を確保することが、産業界からの要請であり「国策」でもあった。集団就職の若者たちが「金の卵」ともてはやされ、その数がピークを迎えたのは、翌 64 年東京オリンピックの年である。

当時を振り返る新聞記事（「朝日」2011 年 2 月 12 日）を教材として活用し、一言触れる。

全入から能力主義へ転換

再昭和史

学校の特色選ぶのが理想

まさに、新聞記事のタイトルにあるように「（希望者）全入から能力主義へ転換」したのだ。当時、都立高校夜間定時制の教員だった亀井浩明（後に、都教委指導部長から帝京大教授へ）は、「入試は必要、高校側が成績で輪切りする今の形ではなく、各校が特色ある教育をし、その教育に合うかどうかを、受験生と高校の双方が確認できる独自入試にする。それが私の入試の理想です。」とコメントしている。彼は、中教審や都立高校「長期懇」（1996～97）の委員として「高校多様化・特色化」路線への旗を振った。現状は、亀井の理想に近づいていると言えるのだろうか。

記事の中で、私の師の一人、竹内常一（國學院大名誉教授）は、「全入運動は、所得倍増計画など、将来に期待する国民の機運と合致した。だが、その流れは職業教育に向かわず、普通科の受験競争につながってしまった」と語る。自ら住まう地域で高校増設運動の先頭に立ち、自宅近くに開校した新設校に、自分の子どもを入学させている。同時期、高校増設運動並びに「全入運動」に関わった元高校教員から、同じような述懐を耳にしたことがあった。普通科偏重は、いまに連なる課題と言える。

2 回目の教材として、他に「1960 年代の教育に関わる年表」、久冨善之（一橋大学名誉教授）「競争激化への道」からみた戦後教育の 3 つの時期」『競争の教育』（労働旬報社／1993）、拙稿「ほころび始めた『競争の教育』―中学と高校との接続のなかで―」教育科学研究会編集『教育』2000 年 3 月号（国土社）、1977 年江戸川区立小岩第五中学校「時間割表」などを資料と提示し、紹介している。

1963（昭和 38）年は、改めて戦後学校教育の大きな転換点だったと考える。

第 2 回の感想の中からいくつか拾う。

●前回の講義で、フィンランドの教育について、個性を伸ばす教育という点を日本人である我々は非常に羨ましく見ていたが、実は戦後教育は、個性を伸ばすことを標榜して始まったということを知り驚いた。日本人は、戦後 70 年を経て、能力が高いことを絶対的な善とし、個性を否定する考え方を定着させてしまっているように思える。競争から溢れた人は社会から見放され、行き場を失っている。この映像は、そのような社会の歪みが顕在化しつつある、まさにその瞬間を捉えていると感じた。（T）

●映像を見て、私は今と変わっていることをあまり見つけることができなかった。今も昔も子どもたちは勉強を自分のためにやっているというより、大人にやらされており、それに打ち勝つことが人生の成功の道だと思っている。現在は勉強して進学しても幸せが保障されるわけではないと感じつつも、レールから外れる勇気はなく、やらざるを得ないのだ。

**　このように勉強を強制される反動からマスコミに刺激を受けることは、今でいうスマホに逃げてしまうことと同じだと感じた。目先の高校、大学進学のための勉強ではなく、未来を見据えた生涯役に立つ勉強を子どもたちが自らすることが、昔から今にかけての課題であるとわかったため、私たちの目標はそれを変えることであると感じた。（H）**

●自発的ではなく講義的で、親や教師から勉強させられるという形式は、この番組が放送された後でも、あんまり変わらないんだと思いました。就職組と進学組に大きな溝があり、暴力沙汰になり、新聞の見

出しに出るなどの事件もあった、ということにも驚きました。

あすなろ会のように、歳の近い先輩方などからの体験談を聞くことによって、将来を前向きに見据えたりすることができる良い機会だと思いました。今はあまり行われていないグループディスカッションを行い、それぞれの意見をぶつけ合い、より良い方向に進む機会だと思いました。自分で意見を発信し、能動的に将来について考えて行きたいと思いました。（U）

※24 人（／135 人）の RP を掲載した講義通信『こだぬき』No.2（2020 年 5 月 3 日発行）から

〔2〕「勉強は何のために？」中学 2 年生の質問に答える

1）その授業内容（手順）を示す

＊事前（前回の課題として）に、「勉強はなんのために？」中学 2 年生に問われたら、どのように答えますか。その段階での自分の言葉を書くことを課題として提出してもらう。

＊『講義通信：こだぬき』に、全員の考え出した言葉を記載（無記名）して、（Zoom では前々日までに）「対面」では当日配布して、軽く目を通してもらう。共感する意見、言葉にチェックをする。

＊あらためて、私から「中学 2 年生（14 歳に）に答える」意義を、先述の内容で伝える。中学 2 年生に向けての回答であることを前提に、言葉を選ぶよう指示する。

＊近くの数人（3〜4 人）でグループを作り（Zoom ではＢR）、自己紹介の後、中学 2 年生に答えることを想定して、自分の考えを順次述べ合う。まとめ（進行）役は「生まれ月の早い人」とか、機械的に指示しておく（立候補あれば、それでもよし）。限られた時間（7〜10 分）にまとめることは困難だが、なるべく共通項を探し出し、互いの了解を得たまとめ方を要求する。あらかじめ用紙とペンは渡しておく。A~Z グループ（全体の人数に応じて）。

＊グループごとに発表する人を決めてもらう。

＊私の方で、グループの数のカードを切り、出てきた文字の 3〜4 グループに発表を求める。自分たちのグループが当たった場合は、全員が前に立ち（教員になれば、前に立つことも必要だし、その練習のつもりで）用紙を持つ人、発表する人。目の前の「ちょっとふけた中学 2 年生たち（受講している学生たち）」に伝わるように発表してもらう。

＊「ふけた中学 2 年生」から遠慮のない質問を受けて、グループでの話し合いをもとに答える。この「なりきり」のやりとりが 2〜3 件交流できると、言葉に真実味や深みが加わり、時に和やかな笑いも生まれる。

＊「ふけた中学 2 年生」がしんと静まり返るようであれば、さらに「ふけた中 2」の私が、少し意地悪な質問を発し、深めてもらうこともある。特に「自分の」「将来の」「選択肢を広げる」ためという言葉は、ツッコミどころがあると考えている。多くが、数ヶ月前までそう言われ続け、自分に言い聞かせて受験勉強に励んできたのだろう。

2）勉強は「自分の」「将来の」「選択肢を広げる」ためにするのだろうか？

グループからの「回答」で、少なくないのがそれら「自分の」「将来の」「選択肢」という言葉だ。もちろん、後述するように、こうした問いに「正解」はないし、どれも間違いだとは言えないだろう。ただ、このワンパターンの答えを、これで良しとは考えたくない。入学して間もない学生たちの、こう言っておけば「良いんじゃね」的感覚から、少し深めてもらいたい。中学 2 年生は納得するだろうか。あえて「そうだろうか？」と問いかけてみることにしている。

「自分のため」って、自分のためだけなんだろうか？もしそうだとしたら、学ぶことで得られることは個人の所有物のようになり、学費無償化や、コロナ禍の今語られる「学費半額化」の要求は出しにくいよね。2009 年秋、日本はすでに批准していた国際人権規約の適用留保（A 規約 13 条 2 項 b,c）を撤回し「高等教育まで漸進的に無償化することを、世界に約束しているわけだけれど。すでに大学まで学費無償の国はいくつもあるし、そうした国々では教育や教育費をどのように考えているのだろうか。」と少し考えてもらう。初回に見たフィンランドも大学まで学費は無償だ。そこには、やはり人々が学ぶこと（教育を受けること）で社会全体が豊かになる、向上する、発展するという考え方があるのだと思う。「自分のため」だけでなく「自分たちのため（社会全体の利益になる）」という意識を持つ必要があるのではないか。「社会課題」と自分の生活との関係に、正面から向き合ってもらいたい、と切に要望するというか、訴える。

発表した学生に「将来っていつのこと？」と尋ねると、高校入試や大学入試としばしば即答される。「いい学校」に入るため、「いい就職先に就く」だったり。さらに「いい学校って？」と問えば「偏差値の高い学校」「名の知れた学校」となったりする。初回と 2 回の RP に書かれた、あの自分の経験と対照的な「フィンランドの教育」に感激し、半世紀を経ても変わらないこの国の「競争主義の教育」に揺れた「思い」は、どこかに吹き飛んでしまったのか？「中学 2 年生」の考える

将来っていつのことなのだろう？…しばし、考えてもらう。私は、あえて「いま学んでいることが楽しい、面白い、興味が湧く」と感じさせる、そう考えさせる、そのきっかけを作るのが教員の本来の仕事、役割じゃないのだろうか、とボールを投げることにしている。

厄介なのは「選択肢を広げる」という答え。「勉強をすることで将来の選択肢が広がる。」この言葉を、これまで親からも先生からも散々言われてきたとの声が多く、いまも信じきっているようだ。でも、本当にそうなのだろうか、私は無理を承知で疑って問い返すことにする。「選択肢が広がるのはいいこと？困ることはないのかな？（時間があれば、牛丼の吉野家と松屋の違いを例にして語るが、必ずしも学生の共感は得られない。）」「大学に入ってみて、どう思う？」「大学卒業間際にも、まだ迷っている人がいるし、ひきこもっていた若者たちと関わっていると、迷って就活をパスしてしまった。就職したけれど働かされ方に不満を持ち、心折れて離職して、…そうしたことを述べる若者が、実は意外に多い。」…私には、今日の、○○大学なら何学部でも良いと言った感じの受験の仕方は理解しがたい。大学は自分が専門的に学びたいと考えて志望先を選び、入学するところではなかったのか。大学（高等教育へ）進学率が、かつての高校進学率に重なっている今日、あらためて考えておきたい。（自分のことは棚にあげる）

「選択肢」が増えるより、「可能性」が広がるほうが、言葉としては腑に落ちるし、不確実な「将来」に重きを置くよりも、中学2年生が「勉強に向かう気持ち」を喚起するには、やはり「いまを充実させること」にフォーカスしたほうが良いのではないだろうか。

「キャリア教育」は「キャリアプランニング型」から「計画的偶発性」理論（planned happenstance Theory）の考え方に変わりつつあると言われる。実際、中学生の頃に夢見た、考えた職業についている人の方が少ないのではないか。まして今日ある職業が、今後も残っていることも考えにくい。大切なのは「なんの職業に就くか」より「どう生きるか」にシフトしていくのではないだろうか。「（学生の）皆さんも、自分の親や周囲の大人が、中学生から今に至るまでどのような変遷の中にいたか、尋ねて見てください。もちろん将来○○になるために頑張るもよし。今を充実させることで先が見えてくるという考え方も大事にしたい。」と伝える。

〔3〕グループ発表の後、あらかじめ用意した「教材」資料をもとにテーマの課題を整理する

1)「正解のない問い」を考えるために、その取り組み方の工夫

「勉強は何のために？」に関わらず、教育活動は正解のない問いに向き合う連続である。向かう目標は同じであれ、実践方法はその時々の生徒の状況に応じて工夫せざるを得ない。このテーマで3つの実践例を紹介してきた。

① 全体で発表会的な取り組みが難しい時（集まることで、生徒間のトラブルが生じる時期もあった。）
「勉強は何のために？」という問いに、全員が自分の意見を書く。提出された全員の意見を名前抜きに、番号で書き出し、紙に印刷する。→次の時間、その全員の意見を読み（黙読）自分が共感（支持）する意見を選び、コメントを書いて提出する。→あらためて支持の多かった意見とコメントを整理し、プリントにする。→次の時間、そのプリントを読み合わせして、感想を述べ合う。

② 【学年全体】シンポジウム形式で（「勉強は何のために？」というテーマで、立場のことなる複数のシンポジストにお話をしていただく）この形だと、事前に質問を生徒が司会進行を執り行うことができる。
例えば、２００７年中１の３月の取り組み。一年間フィリピンのマニラ大学から交換留学で来日し、本校の ELT として生徒に慕われていた M さんが帰国する前に設定した。M さんに加えて、旧知の K さん。K さんは小学校教員を途中退職し、ベトナムに渡りストリートチルドレンのための家を建て、生活するとともに働く〈職業訓練〉場所を築いてきた。実施日は、彼の帰国する日程に合わせて調整した。もう一人、T さん。隣接する小学校から私立中学校に進学したものの、不登校状態に陥り、NPO が運営するフリースペースで学び、高卒認定を取得し、大学に進学した（現在は某自治体職員となり頑張っている）。この三人にそれぞれに「勉強は何のために？」というテーマで「学ぶこと」の意味を語っていただいた。M さんは、発言は流暢な日本語で行なったが、生徒が手にする資料には英語で書いていただいた。

③【学年全体】意見発表会という形で実施する。
「勉強は何のために？」という題で、全員が原稿用紙2枚程度の意見を綴る。→教室内の班ごとに、互いの意見文を読み合い、班の代表を決める。→各教室で、班代表による「意見発表会」を開く。クラスの代表を2〜3人決める。→「学年意見発表会」を

開き、各クラスの代表が発表する。この日に、保護者会を設定し、保護者含む多くの参加者と共有する。

比較的落ち着いた生徒の状況では、こうしたオープンな発表の場が良いと考えている。中学生は、親や教師がどんな言葉を発するか、先回りして考えたり、大体見当がついているもの。ところが、各教室から選ばれてきた代表の意外性含め、同級生の語る言葉に興味津々と、教員が語る言葉以上に集中して聞き入るのだ。また発表する側も、誇らしげに語る。お互いの違いを理解し、受け止める機会ともなる。

また、体育館の舞台にはクラスの仲間が書いてくれた垂れ幕／演題を掲げることにしている。仰々しいが「書道が得意」「レタリングが好き」と見なされる生徒は、ここで仲間のために活躍することができる。毎回、この作業場となる放課後の美術室は、賑やかになる。発表会全体の司会進行も生徒が行うことができる。生徒の出番を増やすこと、それも行事づくりに欠かせない視点となる。

教員生活最後の三年間は、テーマを変えてこのような学年発表会を３回実施した。

2) 「勉強は何のために？」を中２とともに考える際に使用した教材／資料の数々

●「寅さん」の言葉　映画『男はつらいよ＝寅次郎サラダ記念日』(1988 年)

毎年の正月とお盆は、映画『男はつらいよ』のお世話になっていた。当時、研究会の仲間たちと『いまわが子の進路を』という実践本を出版予定し、巻頭の文章は私が担当することになっていた。89 年の正月作品（「寅次郎サラダ記念日」）は、その文を書くのに参考になりそうだった。再び映画館に足を運び、言葉を聞き取り文字に起こすことにした。

―故郷柴又に帰ってきた傷心の寅さんを待っていたのは、大学浪人中の甥ミツオくん。二人は江戸川土手に寝転び大空を仰いでいる。突然、ミツオくんが寅さんにたずねる。「大学へ行くのは何のためだい？」寅さんは「決まっているでしょォ。それは勉強するためです。」「じゃぁ、何のために勉強するのかな？」というミツオくんに、寅さんは何と答えたでしょうか。中学生には、セリフの部分を空白にして、その後の展開を考えてもらっていた。―

しかし、最近の大学生に「寅さん」の認知度は低く、50 作ある『男はつらいよ』を一つでも観たことがあると手をあげるのは、100 人がいたとして 1～2 人。しかも「テレビで放映されたものを親と一緒に観た」という程度であり、「寅さん」の答えとその場面の可笑しさは、セリフだけでは容易に伝わらない。同じ山田洋次監督の映画『たそがれ清兵衛』（原作：藤沢周平：2002）にも、似たような場面があった。「女に学問はいらない」「女は目上の人に質問などしてはいけない」という時代に、清兵衛の娘は「学問は役に立つのですか？」と質問する。10 歳の娘に、清兵衛は「…自分の頭で考えなければならない。…考える力をつける（のが学問）ために、女も男も必要…」と答えた。寅さんがミツオくんに答えた内容と重なる。いずれの脚本も担当した山田監督の考え方でもあろう。

●必ず、中学生と共有してきたのは、80 年代後半東アフリカのモザンビークから来日し、埼玉の医師宅に寄宿して、地域の中学校で学んでいたベンビンダ・ツレさん（ベンちゃん）の「本当に生きるということ」という作文だ。1989（平成元）年法務省が主催する全国人権作文コンクールで法務局長賞を受賞している。ポルトガルの植民地時代を生きたベンちゃんの祖父たちは「アイロンをかけながらノートをかくして勉強していた。」「勉強しているところを見つかったら死刑になってしまいます。」「おじいさんは死ぬことを覚悟し、本当に自分の世界を知るために勉強しました。」「勉強をするということは本当の世界を知るということです。」…この一つの作文からだけでも、勉強の意味や重さが強く伝わってくる。私は、特に「おじいさんが死んだとき、ひとつの図書館がなくなったような気がしました。」という一文に深く考えさせられた。ベンちゃんは、日本で 7 年間の中高校生活を終えて、看護師の資格を取得して帰国。現在は、モザンビークと日本の架け橋として貿易分野や日本大使館等で活躍している。

「世界最高齢の 84 歳の小学 1 年生」としてギネスにも認定されたケニアの元闘士マルゲさんの新聞記事も印刷して配布する。マルゲさんの実話をもとに映画化された『草原とおじいさんの学校』（２０１０年公開）に詳しい。1970 年代末、日本でも放映され話題となった米テレビ番組『ルーツ』についても触れることにしている。また、カナダの環境活動家、当時 12 歳のセヴァン・カリス＝スズキさんが、1992 年初めての国連環境サミット（@リオ・デ・ジャネイロ）の場で行った「伝説のスピーチ」も、時間が許せば DVD で視聴してきた。

大学での「教職入門」の授業にあたっては、パキスタンの少女マララ・ユスフザイさん（2014 年ノーベル平和賞受賞）、スウェーデンの環境活動家グレタ・トゥーンベリさんの活動と、彼女たちの言葉にも触れることにしている。また、マララさんをイメージし、イスラム圏で人気があるというアニメ「ブルカアベンジャー」も紹介する。悪者を退治する道具が「ペン」と「本」という、ブルカ姿の主人公。ア

ベンジャー（復讐者／報復者）が銭形平次ばりに「ペン」と「本」を投げて活躍する。次年度は、マルゲさんを超えた、ケニアのプリシラ・ステナイさんを追ったドキュメンタリー、昨年末公開された映画『GOGO94 歳の小学生』にも触れることになりそうだ。

3）なかなか「自分ごと」として捉えきれない中で「納得解」への共感

考える「素材（教材）」として、様々な作品を資料として紹介してきたが、競争的な学びや「○○対策として」の勉強に、どっぷり漬かってきた大学生には、可塑性のある中学生と異なり「自分ごと」として捉えきれない、ある種のこだわりを強く感じてきた。説得力のある言葉として、ストンと落ちない様子にもどかしさを感じてきた。

そんな時に、我が意を得たりと感じ、加えたのが「納得解」という考え方だ。教育哲学を専門とする苫野一徳（熊本大学）の著書『勉強するのは何のため？』からいただいた。―この問いには、絶対的な「正解」はない。「正解」を求めるより「納得解」を求める問題なのだ―と。自分の置かれたその時々の状況で、「納得できる解」を求めていくことを勧めている。

問いには「正解」がある。「正解」を教わり、「正解」を覚える。そして、深く考えずに（自分の言葉にすることなく）それを「正解」として答える。学生の多くは、そうした繰り返しに慣らされているのかもしれない。ことは自分の価値観に帰する問題だ。無理に唯一の「正解」を求めるのではなく、「正解かもしれない」意見を他者と言葉を交わして、自分の「納得できる解」に近づいていく。そうした面倒臭い過程、「分かりにくさ」を楽しむことこそ大事にして欲しい。教壇に立つ時は、その生徒の数だけ「答え」があるかもしれないし、たとえ同じ言葉が使われたとしても背景が異なれば、その意味が変わるのかもしれない。

〔4〕学生の反応から

最後に、20 年度この授業を終えた学生から届いたコメント（一部）を付しておく。1、2 回目は「資料送付型」の授業だったが、初めてオンタイムで、Zoom の BR を活用したグループセッションを行った。

＊今回の授業では、「納得解」の偉大さを改めて感じました。私自身、中学 2 年生の頃は周りと上手くいかず、「正解」ばかりを追い求める日々でした。しかし、振り返ると、ふとした時に自分の力になってくれたのは、何より自分自身が納得して出した答えだったと思います。だから、「正解」がない世界で、自分の軸になるのはやはり、「納得解」なのだと思います。

また、先生のお話をお聞きし、私が高校生の頃にお世話になった先生が、大学受験直前に「お前は人のために勉強してきたし、これからもそうだ。」と言っていたのを思い出しました。「人のため世のため」ということがよく言われますが、いずれそう思ってやってきたことが自分自身の幸せにもなると私は思います。（M）

＊本来の勉強の意味をすごく考えさせられました。ベンちゃんの作文で、本当の世界を知るために勉強する…という部分がありましたが、おじいさんは本当の世界を知りたいという強い意志に突き動かされたように、今の日本のように義務としてじゃなくて、自分の知りたいものを納得するまで突き詰めて行くような勉強ができる環境を整えたいし、私もやってみたいなと思いました。グループセッションで少し意見を聞きつつも、私が中学 2 年生に勉強の意味を伝えるとしたら、“自分の好きなものを見つけ、活かすため”と伝えたいです。活かすと言うのは、得意分野を駆使して、自分だけじゃなく、周りの人を幸せにする手段を知恵から生み出すと言うことです。今はまだ義務としての勉強ですが、義務で終わらせてしまうのか、何か一つでも生徒の知的好奇心をくすぐってあげられるのかは、将来の私たちにかかっているのではないかと思います。（W）

＊中学・高校では、あまりグループでの話し合いをしたことがなく、良い体験をしました。今回グループセッションをして分かったのですが、同じような年代でも、相手に自分の考えを正確に伝えることはとても難しい、と言うことです。私は、中・高では自分の基礎学力を見極めた上で、やりたいことを探すために勉強し、大学以降では、そのやりたいことについてもっと詳しく勉強する。つまり、専門的な知識を得るために勉強すると言うことを伝えたかったのですが、うまく伝えられず、結論として可能性を広げるためとまとめられました。

しかし、マイナスなことだけではなく、私が思い浮かばなかった考え方を聞くことができました。苦手なものを克服するために勉強すると言う意見でしたが、いまをより良く生きるために苦手なものを克服しなくてはいけないという素晴らしい考え方を聞き、人によって考えることは違うということを改めて感じ、素晴らしい意見交換ができました。今回のグループセッションで、自分の考えを人に伝えることの難しさや、意見をお互い交換し合うことの大切さを学びました。（J）

＊このテーマについて、親と意見を交わしたことはあったけど、自分と同年代の人との意見交換は初だっ

たのでためになった。グループのメンバーから聞いた意見で印象的だったのは、寅さんも言っていた言葉ではあるが、「勉強するのは、困難に直面した時に、自分で考えて、その困難を切り抜けるため」と言う意見である。そのような時に間違った選択をして、解決には至らないことがあるかもしれない。しかし、そのような場合であっても、また新しく自分の力で考えるきっかけになるだろうし、間違いを次に活かすこともできる。これも自分の中では一つの納得解であるなと感じた。

※19 人（／134 人）のコメントを掲載した講義通信『こだぬき』No.3（2020 年 5 月 17 日発行）から

また、最終回前後に、これまでのすべてのテーマの中で特に思い出深い、興味を持ったテーマを一つだけあげてもらう。ここ数年は、LGBTQ の当事者及び若者の団体 NPO 法人 ReBit メンバーの「出前授業」や、厚生労働省委託事業：過労死防止のための「労働法制・労働条件に関する啓発授業」など、ゲストをお迎えした回に「票」とコメントが集まる傾向がある。しかし、第 3 回のテーマ「勉強は何のために？」は、自らの学習観を問い直した機会として、根強い支持があったことを書き留めておきたい。

〔5〕まとめ

教職課程履修の入り口として多摩キャンパスの「教職入門」では、広く浅く学校教育に関わるテーマを掲げて学び合ってきた。より深い議論は、学年が上がり教職取得の意思を固めつつ、専門的な講義の中で深めていただくことを期待している。中に、教職課程を履修するつもりはないが、一般論として「教育」について考える時間を作りたいので、と履修する学生の姿が毎年のようにあったのが嬉しかった。私が新採の頃担任した生徒の姪、最後の中学校現場の教え子との出会いもあった。

履修登録生の数は、2012、13、14、16 年度は、2 コマ合わせ優に 200 人を超えていたが、19 年度はどういうわけか 80 人を下回った。多い時の 1／3。他の年度は 120～140 人台で推移している。「景気（学卒採用状況）が良い時は、教職志望は減少する」と言われている。実際のところは分からない。ただ、「教員の働き方改革」の掛け声と現場での具体化は進められているが、現状では長時間過密労働は避けがたく、残業代そのものの規定がない「給特法（公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法）」による際限のなさ、それを「ブラック化」とみなし、敬遠されていることも事実だろう。教職員を増やす、業務量を減らす、増やすべきは教員の「裁量」だろう。生徒の状況に合わせ豊かな実践を進めるためにこそ、抜本的な改善「改革」が求められる。

また、この回のような学習観を問う経験は、大学生が自らの労働観、人間観、人生観を問い直していく機会になっていることは確かなことと感じている。何より、ベンちゃんの「本当の世界を知る」ことが学びだということは、時代も国境も越えた人々の課題である。今この国に生きる私たちは「本当の世界」を知っているだろうか、知らされているだろうか。隠されてはいないか、騙されてはいないか。…自分ごととして考えよう。そうした問いかけを強調することを忘れないように心がけていきたい。

【参考資料】

■「…現在の高等学校は義務制でこそないが、国民全体の教育機関として、中学校卒業者で希望するものは全て入学させることを立前とし、学区制も法律にその基礎を持っているのである。」文部省『公立高等学校の入学者選抜について』（1951／昭和 26 年 9 月 11 日文初中第 660 号）

■ベンビンダ・ツレ「本当に生きるということ」（1989 年）全文（「東京」1989 年 12 月 4 日）

私の国は 500 年間、ポルトガル人に植民地にされました。私のおじいさんは植民地時代に生きた一人です。

私が小さい時に田舎で家族 50 人くらいで火のまわりに座って昔の話をよくおじいさんから聞きました。ポルトガル人は 16 世紀頃からモザンビークを占領しはじめました。私のおじいさんは、12 歳の時に道を歩いていたら白人につかまえられて白人の家で働きました。毎日朝３時に起きて家の仕事をしました。当時は、黒人は家の中で眠るということは、ゆるされていませんでした。黒人はみんな階段で眠って、食事も家の中の人が食べ残した物を食べていたそうです。

でも、もっとひどいのは、モザンビークが独立するまでは黒人は勉強をしてはいけなかったことです。その中でも、私のおじいさんは、洋服にアイロンをかけながら、ノートをかくして一生懸命勉強をしました。もし、黒人が勉強をしているところをみつかったら死刑になってしまいます。どうして黒人は勉強をしてはいけなかったかというとポルトガル人は、人間が生きる本当の世界をモザンビーク人に教えたくなかったからです。

その時代の中で、モザンビーク人は生きていくのにとても努力と勇気がいったと思います。勉強をしているところをみつかったら、死刑になるなんてい

うことをかんがえられますか？

私の国は植民地であったため、勉強をしてはいけなかったことで、学習的な面や医学的な知識などが大きく 500 年も遅れてしまいました。今のモザンビークの子どもたちは、ノート、鉛筆もない。もちろん教室もない、今はみんな、木の下を教室にして勉強をしています。字は土の上に書きます。土の上だと、字が一度消えたら二度と戻ってきません。だから、その時に全部おぼえなければなりません。今、私、そしてみんなも含めて目の前にノートはある。鉛筆、教室、給食だってある。みんな恵まれすぎています。私は、みんなの勉強や生活態度を見て、これでいいのだろうか？と私は思いました。私は、自分が今味わっている生活を、いつかは味わった分だけモザンビークのみんなに返してやりたいと思っています。

私のおじいさんは、86 年に死にました。おじいさんが死んだ時、一つの図書館がなくなったような気がしました。モザンビークが平和になった時、もう一度、あの赤い炎のまわりで、話を聞きたかったです。アフリカには植民地時代がありました。今は内戦や干ばつで苦しんでいるけど、五つの大陸の中で、一番人間性が残っていると私は自信を持って言えます。私のおじいさんは、死ぬことを覚悟し、本当の自分の世界を知るために勉強をしました。勉強するということは、本当の世界を知るということです。

みなさんも日本の恵まれた条件を生かして、もっともっと世界をみつめ、そして自分のありのままの姿をもう一度振り返って見てください。（全国中学生人権作文コンテスト法務局長賞　主催：法務省）

【参考図書／映画等】

＊菊地良輔『勉強は何のためにするのか一生きることと学ぶこと』（民衆社／1984 年）
＊鈴木光司『なぜ勉強するのか？』（SB 新書／2007）
＊桐光学園＋ちくまプリマー新書編集部編『何のために「学ぶ」のか』（ちくまプリマー新書／2015）
＊竹内塾（教育学者：竹内常一を塾長とする私的な学習会、故人となったもとでは「竹の子塾」として継続中）
＊児美川孝一郎『キャリア教育のウソ』（ちくまプリマー新書／2013）
＊苫野一徳『勉強するのは何のため？僕らの「答え」のつくり方』（日本評論社／2013）
＊池上彰『なんのために学ぶのか』（SB 新書／2020）
＊セヴァン・カリス＝スズキ『伝説のスピーチ』（国連環境サミット＠リオ／1992：DVD）
＊マララ・ユスフザイ『わたしはマララ』（Gakken／2013）
＊マレーナ＆ベアタ・エルンマン、グレタ・トゥーンベリ他『グレタたったひとりのストライキ』（海と月社／2019）
＊映画『男はつらいよ一寅次郎サラダ記念日』（監督：山田洋次／1988）
＊映画『たそがれ清兵衛』（原作：藤沢周平、監督：山田洋次／2002）
＊映画『おじいさんと草原の小学校』（英＆ケニア／2010 公開）マルゲさんの実話を基にした映画
＊映画『GOGO94 歳の小学生』（仏／2020 公開）ドキュメンタリー

【第 1 回資料】

＊映像「フィンランドの教育」マイケル・ムーア監督『世界侵略のすすめ』（米／2016 公開）より
＊拙稿：「人と人との出会いが面白い一教師として地域になぜかかわるのか」
地域教育連絡協議会編集『子ども空間』（1992 年 5 月創刊号）
＊拙稿：「もっと学びたい、仲間が欲しい、青春を謳歌したい、若者の思いが形になるように応援したい。」佐賀県立佐賀北高校通信制編『樟蔭』（2015 年 2 月 27 日号）

【第 2 回資料】

＊NHK 制作『日本の素顔―現代の子どもたち』（1963 年 5 月 5 日放映）2007 年 NHK アーカイブス
＊藤沢市教育文化センター『第 11 回「学習意識調査」報告書―藤沢市立中学校 3 年生の学習意識調査―』2016 年 3 月
＊新聞記事「昭和史再訪　全入から能力主義へ転換」2011 年 2 月 12 日『朝日新聞』
＊久冨善之『競争の教育』（労働旬報社／1993）
＊矢口高雄『螢雪時代』（角川文庫／1999）
＊拙稿：「ほころび始めた『競争の教育』―中学と高校との接続の中で一」『教育』2000 年 3 月号

【関連する論考】

＊拙稿：「中学生活でのゆれ」全国進路指導研究会編『い

まわが子の進路を』（民衆社／1990 年 8 月）
＊拙稿:「『勉強は何のために』を考え合い・学び合う」
東京経済大学会誌 258 号（2008 年 3 月）